

## 国際水研 第 118 回 所内談話会

「新たに国際水研に加わった学位持ち研究者の研究紹介」

- 日 時： 2017 年 6 月 6 日（火） 13：30～  
場 所： 国際水研会議室「富士」（清水庁舎本館 2 階）  
講演者： ・くろまぐろ資源部 くろまぐろ生物 G 研究等支援職員： 澤井悦郎  
・くろまぐろ資源部 くろまぐろ生物 G 研究等支援職員： 河津優紀  
・くろまぐろ資源部 くろまぐろ資源 G 研究等支援職員： 大橋優季

### 研究紹介

くろまぐろ資源部 くろまぐろ生物 G 研究等支援職員 澤井悦郎

マンボウは IUCN のレッドリストに掲載され、クロマグロと同じカテゴリー VU に加えられた絶滅危惧種である。マンボウは巨体さやユニークな形態から水族館などで人気の高い魚種であるが、生態に関しては不明な点が多い。近年、バイオロギングや DNA 解析など新しい手法を用いた研究により、徐々に生態学的知見が蓄積され始めたが、分類学的混乱が生じており、分類の見直しが急務とされる。

筆者はこの特異な魚に興味を持ち、広島大学の修士課程（2007 年）から、分類、生態、民俗と幅広い視点から研究を行ってきた。本発表では、現在進行中の「全世界を対象としたマンボウ属の分類学的再検討プロジェクト」を中心に、1 世紀ぶりの新種を含む最新の分類学的知見を紹介する。

### 研究紹介

くろまぐろ資源部 くろまぐろ生物 G 研究等支援職員 河津優紀

日本の水産業、食文化において、ニホンウナギ、マアナゴ、ハモに代表されるウナギ目魚類は欠かすことが出来ない魚種である。近年、ニホンウナギ資源の減少が周知される中、マアナゴ資源にも減少傾向が認められ始めている。しかしマアナゴの生態、中でも再生産機構に関する知見は依然として乏しく、繁殖生態に基づいた具体的な資源管理には至っていない。近年では、マアナゴの産卵場がマリアナ海溝近傍、九州 - パラオ海嶺上に発見された。また成魚の繁殖生態に関する数少ない知見では、卵黄形成に至った雌が冬季に成長海域であった内湾を移出すること、大型個体が夏季の東シナ海陸棚上を南下すること、それら大型個体は体色が黒化し、沿岸の個体の様相と異なること、が報告されている。従ってこれらの断片的な知見より、マアナゴは産卵を目的とした移動・回遊を行う可能性が指摘されるに至った。これらの背景より、本研究では、湾内、沿岸～沖合（湾外）、陸棚上～縁辺域（東シナ海）よりマアナゴ標本を採集し、成長、成熟に伴う移動を連続的に捉え、産卵回遊について考察した。しかしマアナゴ単種の性状把握のみでは比較対象を欠いた考察が限界となる。そこで本研究では、マアナゴ同様に東シナ海に生息する他のアナゴ科魚類、オオシロアナゴ、シロアナゴ、ゴテンアナゴを比較対象として用い、それぞれの繁殖生態を比較、考察した。

## 研究紹介 「ハリゴチ科魚類の系統分類学的研究」

くろまぐろ資源部 くろまぐろ資源 G 研究等支援職員 大橋優季

ハリゴチ科魚類は頭部が著しく縦扁する, 頭部と体の背面に多くの棘や隆起縁がある, 胸鰭下部に遊離軟条があるなどの極めて特異的な形態をもち、太平洋とインド洋の温・熱帯域の大陸棚から大陸斜面に生息する底生性魚類である。本科はカサゴ亜目に属し、これまで1属約10有効種が認められた非常に小さな分類群である。近年は本科の未同定種や未記載種が複数報告されているにも関わらず、本科の包括的な分類学的研究は行われてこなかった。そこで本研究は、ハリゴチ科の分類学的再検討を行うとともに、同じくこれまで行われてこなかった本科の系統類縁関係を推定し、ハリゴチ科の分類体系を再構築することを目的として行われた。

その結果、ハリゴチ科に従来認められていた1属に加え、新参異名と扱われていた1属を復活させた2属、および3新種3未記載を含む15種をハリゴチ科に認める結果となった。本発表では、これらの結果の一部を紹介する。